

**教育報告**

## 合同授業における異文化間コミュニケーション力の開発 —日本人学生と留学生とのディスカッションからの一考察—

小木曾 左枝子

本稿は、富山大学で2019年度前期に教養教育科目（人文科学系）として開講された「異文化間コミュニケーション」で行なわれた合同授業における日本人学生と留学生のディスカッションの実践報告を目的とする。日本人学生向けに開講された異文化理解のコースの中で、どのように留学生とのディスカッションを組み入れたかを紹介し、留学生とのディスカッションが、日本人学生の異文化間コミュニケーション力開発にどのような役割を担えるかを、授業アンケート結果を中心に考察する。

### 1. はじめに

多田（2017）は、「学習者が授業において「楽しさ」を感得する」（p. i）のは、「自分の発想や気づきが認められたとき、また、他者の意見や感想などから、未知の世界・新たな発見を知ったとき、さらには、仲間との対話や共同作業をしつつ「深い思考」ができたとき、すなわち、次々と思考が深まり視野が広がる愉快を感得できたとき」（p. i）ではないだろうかと提言している。

本稿は、単に異文化間コミュニケーションに必要な知識を教科書や参考書から得るだけでなく、学生が自分自身で考え、発見し、思考を深め、そして学習に楽しさを自ら導き出せるようにすることを目的として、合同授業という形で留学生とのディスカッションを授業に組み入れた教育報告とする。

そして、グローバル人材の育成が求められる中、同時に若者の「内向き志向」傾向が指摘される昨今において、積極性を養うことも目的として、留学生とのディスカッションを取り入れ、アクティブ・ラーニング形式の授業で、異文化理解を深めると同時に、自己表現力を高めながら異文化間コミュニケーション力を養うことを目指した実践を紹介する。

## 2. 「異文化間コミュニケーション」の授業概要

まず、「異文化間コミュニケーション」の授業概要を述べ、合同授業として行なわれた留学生とのディスカッションの位置づけを示す。以下、履修学生・合同授業に参加した留学生、合同授業の運営、授業のねらい・達成目標、授業スケジュール・評価について説明する。

### 2. 1. 履修学生・合同授業（ディスカッション）に参加した留学生

「異文化間コミュニケーション」は、2019年度前期に富山大学の人文科学系教養教育科目として1年生から4年生までを対象に開講された科目である。履修学生は合計20名で、1年生が17名、2年生が1名、そして日本語で授業参加可能な日本語力を有する韓国からの交換留学生が2名受講した。学部別には、工学部が9名、都市デザイン学部が5名、医学部、人文学部、理学部が各2名だった。また、性別は男子学生が18名、女子学生が2名と、男子学生が9割を占めるクラスとなった。

一方、合同授業のディスカッションに参加した留学生は、国際機構の日本語中級クラス聴解・会話Bを受講していた22名で、出身地は、オランダが11名、台湾とロシアが各3名、中国が2名、アメリカ、タイ、ベトナムが各1名だった。性別は、男子学生8名、女子学生14名だった。日本人学生、留学生合わせて、男子学生が多い構成となった。また、留学生の出身地は、オランダが多い構成となった。

留学生は、渡日してから半年ほど国際機構の初級クラスで日本語を学習した後、中級クラスを受講していた学生も数名いたが、渡日したばかりの学生が半数以上で、自国での学習経験はあっても日本滞在期間が短い留学生が大半だった。「異文化間コミュニケーション」の履修学生には、事前にそういった留学生の日本語力や日本滞在歴などの背景も説明し、ディスカッションでは、いわゆる「やさしい日本語」で話すことが求められることを伝えた。

### 2. 2. 合同授業（ディスカッション）の運営

合同授業の運営は、国際機構の日本語中級クラス聴解・会話Bを担当していた横堀慶子先生と事前打ち合わせを行ない、グループ分け、ディスカッションのトピック、各クラスでの事前準備等の調整を行なった。グループは、全体を8つほどのグループに分け、1グループが5～6名となるようにし、また日本人学生と留学生の数に差が出ないようにした。ただ、欠席などでグループの人数に調整が必要な場合は、当日、適宜対応する形にした。「異文化間コミュニケーション」を受講していた2名の韓国人留学生は、日本語習熟度も高く、日本事情・文化にも十分な知識があったため、日本人学生と同等に考え、グループ分けを行なったが、ディスカッションでは、留学生の立場としても自由に発言してほしいことを本人達に伝えた。

また、当日のディスカッションを円滑に進めるために、各グループのグループリーダーを日本人学生、留学生から1名ずつ指名した。そして、ディスカッション終了後、各グループで話したことをグループリーダーがクラス全体に共有する形にした。グループは、毎回メンバーを変更し、各学生がク

ラスのより多くの学生とディスカッションできる機会を設けるようにした。グループリーダーも毎回変更し、全員がグループリーダーを体験し、ディスカッションの円滑な進行について深く考える機会を持てるようにした。

### 2. 3. 授業のねらい・達成目標

この「異文化間コミュニケーション」の授業では、グローバル社会への理解を深め、異文化間コミュニケーションの図り方の向上を第一のねらいとした。また、グループワークやディスカッションなどのアクティブ・ラーニング型の授業を通して、積極性や自己表現力を養うことも目標とした。そして、異文化という観点からコミュニケーションの具体的な事例について考え、異なる文化背景を持つ人々とコミュニケーションを行なう素地を養いながら、留学生とのディスカッションを通し、異文化間コミュニケーション力や自己表現力を高めることを目指した。

シラバスに提示した、これらのねらい・目標が達成できたかどうかは、授業アンケート結果などを示した上で、その分析を後述する。また、ディスカッションが授業の目標を達成する上で、どのような役割を果たしたかも考察する。

### 2. 4. 授業スケジュール・評価

全15回（1コマ90分×15）の授業は、表1のスケジュールに従って進めた。合計6回行なった留学生とのセッションは、講義やグループワークで扱ったトピックと関連付けながら組み入れた。

初対面の留学生と第1回目のセッションからディスカッションを行なうことに難しさを感じる学生がいることを考慮し、最初に自己紹介及び自由に質問し合うフリートークの時間を設けた。第2回から5回のセッションでは、日本語で留学生とのディスカッションを行ない、最後の第6回セッションは、学生からの希望を考慮し、英語でのディスカッションを試みた。

授業の評価には、全6回の内省レポートを課した（資料1参照）。講義を通して学んだことを踏まえ、グループワークや留学生とのディスカッション等をふり返り、深く考えることを目的として、全てのレポートに「一般論ではなく、自分が感じたことや考えたことをまとめ、そしてそれを分析すること」という注意書きをつけた。

表1 授業スケジュール

第1回授業	オリエンテーション 留学生とのセッション（1）自己紹介、フリートーク [日本語]
第2回授業	講義・グループワーク「異文化理解とは？」
第3回授業	留学生とのセッション（2）ディスカッション① [日本語] → 第1回レポート
第4回授業	講義・グループワーク「コミュニケーションのスタイル」
第5回授業	留学生とのセッション（3）ディスカッション② [日本語]

第6回授業	講義・グループワーク「世界の4つの価値観」→第2回レポート
第7回授業	留学生とのセッション(4) ディスカッション③ [日本語]
第8回授業	講義・グループワーク「自己開示」→第3回レポート
第9回授業	留学生とのセッション(5) ディスカッション④ [日本語]
第10回授業	講義・グループワーク「言語コミュニケーション」→第4回レポート
第11回授業	講義・グループワーク「対立管理スタイル、異文化適応力」
第12回授業	グループワーク：プレゼンテーションの準備 → 第5回レポート
第13回授業	講義・グループワーク「非言語コミュニケーション」
第14回授業	留学生とのセッション(6) ディスカッション⑤ [英語] → 最終レポート
第15回授業	講義・グループワーク：まとめ、グループ・プレゼンテーション

### 3. 合同授業（ディスカッション）の実施

次に、実際にどのようなトピックで、どういった内容のディスカッションを留学生と行なったかを説明する。また、授業開始時に行なったアンケート結果から、履修学生の異文化や留学生とのディスカッションへのレディネスを示す。

#### 3. 1. 履修学生の異文化へのレディネス

異文化体験については、授業開始時に表2にある6項目の質問をする形でアンケート調査を行なった。このアンケートの質問項目は、宮里（2017, p. 148）を参考に作成した。

表2 異文化体験についてのアンケート質問項目

質問1	今までにどんな異文化教育を受けましたか。それはいつどのようなものでしたか。
質問2	海外経験はありますか。いつ、どこに、どのような形で、どのくらいの期間いましたか。
質問3	異文化や自分の文化についてどんなことをイメージしていますか。また、異文化の人（外国人など）に対して、どのような印象を持っていますか。
質問4	異文化（外国人）の友人や知り合いなどがいますか。どんな異文化体験をしましたか。
質問5	あなたが期待する異文化の授業とはどんなものですか。この授業でどのようなことを学びたいですか。
質問6	あなたは今後自分の人生で異文化体験をしたいと思いますか。

アンケートの結果、質問1の異文化教育については、質問が具体的でなかったことも影響したが、20名中7名が小学校から高校までの英語の授業やALT（外国語指導助手）の先生とのコミュニケーション、2名が英語以外の科目での学習経験を述べていた。短期留学や修学旅行での海外経験を述べた

学生が2名いたが、交換留学生として受講していた2名の韓国人学生を除き、7名の学生は異文化教育を受けたことがないという回答だった。

質問2の海外経験については、2名の交換留学生を除いては、4名の学生が3日から2週間の海外滞在歴があり、その目的は家族旅行、修学旅行、短期留学などで、滞在先はアメリカ（ハワイ）、ニュージーランド、フランス、台湾だった。

質問4の異文化（外国人）の友人や知り合いがいるかについては、2名の交換留学生を含め、9名の学生が「いる」、11名の学生が「いない」と回答した。大学に入学してからを含め、小学校から高校までの間に、同級生として外国人の友人と知り合ったという回答が大半だった。

質問6の異文化体験への希望は、この「異文化間コミュニケーション」の授業を受講希望したということもあり、全員が「したい」と回答し、積極的に言語や文化を学びたいというコメントが多かった。

質問3と5の回答結果は、ここでは詳細は省略するが、質問3の異文化の人々に対する印象は肯定的なコメントが多く、質問5の異文化の授業については、様々なコメントから異文化に対する積極性がうかがえた。2名の交換留学生を除き、長期の海外経験がある学生はいないものの、日常生活で何らかの形で異文化経験がある学生が半数ほどおり、異文化に対する態度からある程度のレディネスはあると考え、留学生とのディスカッションの実践を始めた。

### 3. 2. ディスカッションへのレディネス

上記で述べた異文化へのレディネスに付け加え、授業活動としてのディスカッションに対して、どう感じているかを事前に知るために、ディスカッションについては、表3にある2つの項目をアンケートで質問した。

表3 ディスカッションについてのアンケート質問項目

質問1	これまでに、授業の活動として留学生とディスカッションをしたことがありますか。 「はい」と答えた人は、その回数も書いてください。
質問2	一般的に授業の活動としてのディスカッションが好きですか。

質問1の留学生とのディスカッション経験については、2名の韓国人学生は、留学生ということもあり、日本語の授業などでディスカッションの経験が「何回もある」との回答だった。その他18名の日本人学生のうち2名が「ある」と回答したが、16名は「ない」との回答だった。「ある」と答えた2名の学生の回数は、1名が「1回」、もう1名が「3回」だった。

質問2の授業活動としてのディスカッションが好きかという質問については、1名を除き全員が「はい」という回答だった。「どちらとも言えない」と回答した1名は、ディスカッションをする相手によって話が續かないこともあるからという理由だったが、「いいえ」と答えた学生はいなかった。

以上のことから、留学生とのディスカッション経験がない学生が多いが、ほとんどの学生がディスカッションという授業の活動に肯定的だと考え、ディスカッションを実践していくことにした。

### 3. 3. ディスカッションのテーマ

上記で述べた異文化やディスカッションへのレディネスを踏まえ、合同授業として行なったディスカッションのテーマを表4に示す。また、講義やグループワークで行なったことに加え、ディスカッションの内省のために、課題として出した授業レポートの指示を資料1に記す。

表4 ディスカッションのテーマ

ディスカッション①	「カルチャーショックについて考える」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生に日本でのカルチャーショック経験について聞く</li> <li>・留学生から聞いたカルチャーショック経験について、説明や助言をする</li> </ul>
ディスカッション②	「理想の結婚相手・パートナーとは？」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・結婚相手・パートナーに求めることは何か、留学生と意見交換をする</li> </ul>
ディスカッション③	「学生が選んだテーマでのディスカッション」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の制服を廃止し、服装を自由にするべきか</li> <li>・タトゥー（刺青・入墨）は社会的に受け入れられるべきか</li> </ul>
ディスカッション④	「初対面の人との会話」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・プレタスク（一度も話したことをない人を探し、お互いのことを知るために話をする）で、どんなことを話したかを共有する</li> <li>・今まで初対面の人に聞かれて嫌だと思った経験について話す</li> <li>・「初対面の人との会話」のリストを見て、話題にしてもいいと思うもの、話題にしないほうがいいと思うものについて話し合う</li> </ul>
ディスカッション⑤	「英語でのディスカッション」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ School and company uniforms should be abolished</li> <li>・ We should not let elementary school kids use smartphones</li> <li>・ Tobacco should become an illegal drug</li> <li>・ Japanese companies should use English as their main language of business</li> </ul>

ディスカッション①は、第2回授業で「異文化理解とは？」をテーマに「ステレオタイプ」や「見える文化と見えない文化」について扱ったので、それと関連づけて「カルチャーショック」をディスカッションのテーマとした。

ディスカッション②は、ディスカッション後の第6回授業で「世界の4つの価値観」というテーマを扱う予定だったので、その前に「理想の結婚相手・パートナー」という身近なトピックから価値観について考える機会を設けるために行なった。

ディスカッション③は、学生が話し合いたいと思うトピックでディスカッションを行ない、そこから第4回授業で扱った、あいづちやターン・テークを含む「コミュニケーションのスタイル」を実際に考えることを意図して行なった。

ディスカッション④は、第8回授業で扱った「自己開示」というテーマについて、実際の日常のコミュニケーションに置き換えて考える機会を設けるために、「初対面の人との会話」をトピックとした。

ディスカッション⑤は、学生から英語でのディスカッションにも挑戦したいという希望があったこともあるが、ディスカッションの使用言語によって自身のコミュニケーションのスタイルがどう変わるかを実際に考えるいい機会になると思い、比較的話しやすいと思われるディスカッションのトピックを複数提示し、グループで話すトピックを決める形式を取った。

#### 4. 授業終了後のアンケート結果からの考察

上記のように「異文化間コミュニケーション」の授業に留学生とのディスカッションを取り入れた効果を、授業終了後のアンケート結果から考察する。授業終了後のアンケートでは、授業目標達成度、そしてディスカッション満足度に関して、質問項目を設けた。

##### 4. 1. 授業目標達成度

授業目標が達成できたかどうかは、表5にある3つの項目について質問し、その達成度を学生は「4: 達成できた」「3: まあまあ達成できた」「2: あまり達成できなかった」「1: 達成できなかった」と数字で記入する形を取り、その理由やコメントなどを記入できる自由記述欄も設けた。このアンケートの質問項目は、宮里（2017, p. 151）を参考に作成した。

表5に授業目標達成度の結果をまとめる。

表5 授業目標達成度のアンケート結果

質問項目	達成度
1. 個人の価値観や慣習などを異文化との比較により認識し様々な文化の知識を身につける。その過程で、自文化を客観視したり、自文化と他文化を関連づけたりして捉えながら、日本文化や自分自身の理解を深め、異文化適応のスキルを学ぶ。	達成できた：13名 まあまあ達成できた：7名 あまり達成できなかった：0名 達成できなかった：0名 平均達成度：3.7
2. 様々なテーマについてグループやクラスで話し合う中で、自分と他者との違いについて発見し、内省しながら、文化やコミュニケーションについて深く考える。	達成できた：9名 まあまあ達成できた：10名 あまり達成できなかった：1名 達成できなかった：0名

	平均達成度：3.4
3. グループでのディスカッションにおいて、メンバーとの意見交換や調整を通して、自分の意見を提示することに慣れると同時に、クラスでのまとめ報告など、クラスで発見することにも抵抗感なく取り組める。	達成できた：10名 まあまあ達成できた：6名 あまり達成できなかった：4名 達成できなかった：0名 平均達成度：3.3

表5から分かるように、どの項目も数値で見ると、4点中3.3～3.7と比較的高い達成度を示していると言える。

質問1については、全員が「達成できた」か「まあまあ達成できた」のいずれかの回答で、自由記述のコメントにも「外国人と話す機会が多く、様々な異文化適応スキルが身についた」「ここまで他の国の人と深く関わったことがなかったから楽しかったし、色々な国の人と話しながら日本の文化は愛されているのだと感じた」などと書かれており、留学生とのディスカッションが授業達成度に有効に影響している一面もうかがえた。

質問2についても同様で、1名を除き、全員が「達成できた」か「まあまあ達成できた」のいずれかの回答だった。「あまり達成できなかった」と回答した1名の学生のコメントには、「自分はグループメンバーの話を聞いて、その意見を自分の意見と自分の中で比較していた」と書かれており、「あまり達成できなかった」と回答したものの、自分と他者との違いを発見して比べることができていたことがうかがえた。

質問3については、「あまり達成できなかった」と回答した学生が4名おり、質問1と質問2と比べると、達成度が低いと言えるが、これについては、留学生とのディスカッションというよりは、通常授業におけるグループワークでのプレゼンテーション準備（第12回授業）や実際のプレゼンテーション（第15回授業）と関係していることがコメントからうかがえた。「あまり達成できなかった」と回答した学生が4名のうち2名が、自由記述のコメントに、「日本人学生と話すことはあまりしなかったけれど、留学生とのディスカッションはとても自発的にコミュニケーションをして意見交換することができた。しかし、日本人学生との最後のグループワークはあまり関わることができなかった」「自分は発表を行わず、裏方に回った」といったことが書かれていた。

#### 4. 2. ディスカッションの満足度

ディスカッションの満足度は、表6にある3つの項目について、「はい」「いいえ」「どちらとも言えない」の形式で答えを選ぶ形式で、質問した。そして、その理由等を記入する自由記述の欄も設けた。



表6 ディスカッションの満足度についてのアンケート結果

質問項目	回答
1. 留学生とのディスカッションに満足しましたか。 (学習活動として楽しめましたか。)	はい：20名    いいえ：0名 どちらも言えない：0名
2. 今後も授業の活動として留学生とディスカッション をしたいですか。	はい：20名    いいえ：0名 どちらも言えない：0名
3. 留学生とのディスカッションを通して、異文化理解が 深まりましたか。	はい：18名    いいえ：1名 どちらも言えない：1名

表6の結果から分かるように、留学生とのディスカッションの満足度は非常に高く、質問1、質問2ともに、全員が「はい」と回答した。質問3については、「いいえ」と回答した学生が1名、「どちらも言えない」と回答した学生が1名いた。「いいえ」と回答した学生は、海外滞在経験があり、「実際に外国へ行って体験してみないと分からないことも多いのではと思った」とコメントが書かれていたことから、自分の実際の経験と比較したと思われる。また、「どちらも言えない」と回答した学生は、自由記述のコメントに「国や文化より、人によって変わることが多かったから」と書かれており、これは出身地が違う留学生と毎回ディスカッションをしたことによる結果で、否定的な反応と言えるものではないと考える。

## 5. まとめ

本稿では、日本人学生向けに開講された「異文化間コミュニケーション」の授業で、合同授業として取り入れた留学生とのディスカッションについて、その実践を紹介した。

北出(2010)は、異文化間コミュニケーションを学習する上で教育が担う役割を2点挙げている。1点目は「異文化を持つ者で構成される対等なコミュニケーションの機会を提供し、促す」(p.70)ことで、2点目は「学習者の個人的変化・学習につながるような内省、分析、適切な行動を促進する」(p.70)ことである。

本稿での取り組みは、複数回にわたり日本人学生と留学生のディスカッションを実施しており、北出が提唱する1点目の役割はある程度担えたと言える。また、学生の自己評価による授業目標達成度のアンケート結果からは、ディスカッションが異文化間コミュニケーション力育成につながったことが垣間見られ、そして、ディスカッションの満足度についてのアンケート結果からは、学生が学習に楽しさを見出したこともうかがえる。

ただ、楽しさを導き出したのが多田(2017)の言う「深い思考」(p.i)ができたことによるものかどうかは、更なる検証が必要である。そして、北出が提案する2点目の「個人的変化・学習につながるような内省、分析」は、ディスカッション後に課題として出された授業レポートによって促すことができたと言えるが、そこから「適切な行動を促進する」ということを、どのように実践していくかは、今後の課題である。

参考文献

- 北出慶子（2010）「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案—異文化間コミュニケーション能力理論と実践から」『言語文化教育研究』9（2）， pp. 65-90.
- 多田孝志（2017）『グローバル時代の対話型授業の研究—実践のための12の要件』東信堂.
- 宮里恭子（2017）「授業における日本人学生の異文化間コミュニケーション力育成—学生による授業評価と自己分析の視点から—」『白鷗大学教育学部論集』11（3）， pp. 113-152.

資料1 授業レポートの指示

<p>第1回レポート</p>	<p>以下の3つについて、自分が感じたことや考えたことをまとめてください。</p> <p>① ディスカッションを通して、自分のコミュニケーション・スタイルについて考えたこと、留学生や日本人学生とのコミュニケーションで難しさを感じたこと（500字以上）</p> <p>② 自分の異文化適応（「異文化」＝富山での新生活）のプロセスについて考えたこと（500字以上）</p> <p>③ 留学生から日本でのカルチャーショックについて聞いて考えたこと（500字以上）</p>
<p>第2回レポート</p>	<p>以下の2つについて、授業レポートを書いてください。</p> <p>① 「理想の結婚相手・パートナー」のディスカッションにおいて、留学生や他の日本人学生との意見交換を通して、価値観の違いについて考えたことや感じたことを書きなさい。（600字以上）</p> <p>② 授業で扱った「世界の価値観」から1つを選び、自分が考えたことや感じたことを書きなさい。（600字以上）</p>
<p>第3回レポート</p>	<p>以下の2つについて、授業レポートを書いてください。</p> <p>① 「タトゥー」と「制服」のディベートにおいて、自分の意見を述べたり、相手の意見に賛成したり反対したりする時のコミュニケーション・スタイルについて考えたことや感じたことを書きなさい。（600字以上）</p> <p>② 授業で扱った「自己開示」について、自分の自己開示度の分析を含め、考えたことや感じたことを書きなさい。（600字以上）</p>
<p>第4回レポート</p>	<p>以下の2つについて、授業レポートを書いてください。</p> <p>① 「初対面の人との会話で話すこと」のディスカッションにおいて、留学生や他の日本人学生との意見交換を通して、自分が考えたことや感じたことを書きなさい。（600字以上）</p>

	<p>② 授業で扱った言語コミュニケーション（「自己紹介」「ほめ方」「叱り方」「謝り方」「誘い方と断り方」）について、自分が考えたことや感じたことを書きなさい。（600字以上）</p>
第5回レポート	<p>以下について、授業レポートを書いてください。</p> <p>① 配布資料の「対立管理スタイル」でセルフチェックを行ってください。その結果を考慮に入れながら、グループワーク（グループ・プレゼンテーションの準備）において、自分が考えたことや感じたことを書いてください。そして、グループワークを通して考えたことや感じたことを、どう異文化間コミュニケーションに活かせると思うかを述べてください。（600字以上）</p>
最終レポート	<p>今までの授業の中で「世界の価値観」、「自己開示」、「対立管理スタイル」などのトピックを通して自分自身を振り返る機会がありました。また、留学生とのディスカッション、クラスメイトとのディスカッションやグループワークを通して、自分自身のコミュニケーション・スタイルについて考える機会もありました。</p> <p>① まず、今までに書いた授業レポート（5回分）をもう一度読み返し、授業とともに自分がどのように感じてきたか、考えてきたかを改めて確認してください。そして、「異文化間コミュニケーション」のクラスを通して、自分が感じたこと、気づいたこと、考えたこと、学んだことなどを自由に書いてください。</p> <p>② そして、①で書いたことを、今後の実生活の中で、どのように生かしていくのか、役立てていくのかについて書いてください。</p> <p>③ 次に、参考資料の「異文化適応力チェック」、「異文化理解への態度」を読んでください。資料にあるセルフチェックも行い、その結果も考えながら、また②で書いたこととも関連付けて、今後、異なる文化背景や価値観を持つ人々と、自分がどのように接していきたいかを書いてください。</p> <p>上記の①～③をまとめて、1800字以上の最終レポートを書いてください。</p>

小木曾左枝子

立命館大学グローバル教養学部（2019年3月末まで富山大学国際機構所属）